

11月7日（火曜日）

高千穂から椎葉へ民俗学の旅

憧れの平家落人の里 椎葉村

高千穂—阿蘇神社—高千穂—椎葉 歴史民俗資料館

織方俊輔氏のガイドで神楽に関心が高まる。標高 900 米の民宿「焼畑」で椎葉の最後の語り部クニ子女史から学ぶ。

国見が丘（513m）は凍るような寒さだ。6時15分のご来光（日の出）と雲海を見るために午前5時40分に起きたから是非とも見届けたい。生憎、雨と風で邪魔されて雲海は見えずニニギノミコトが大錐（オオクワ）と小錐（オクワ）の引率で降臨されたという実感は得られなかった。しかし、眼下に高千穂町（1.4万人、かつて最高2.3万人）を見わたすと、海をわたってきた渡来人でも神々しく映るはずだ。8時半に高千穂ホテルへ教育委員会の田尻隆介課長（6年のベテラン）が中元氏の依頼で私のガイドに来られた。哲学者、梅原猛の専属ガイドで「天皇家の“ふるさと”日向をゆく」の中にも紹介されている。

梅原氏はかなり霊的な学者で、足でインスピレーションを得ることが得意な民族学者とみえ、口数の少ない女房を同伴していたという。しかし著名な学者で、カメラマン付き添いで、神楽見学でも特別セットが用意されたというから、まさにセレブ。駆け出し民俗学者の私にとり天下人、雲上の人となる。歴史学とは井上光貞氏（国立歴史民俗博物館）によれば、文献史学、考古学、民俗学を含むものだという。梅原氏はリサーチにより、陽明学と国学が盛んであった薩摩に心を傾けるようになる。

しかし彼は霧島山の山頂の「天の逆錐」を見て、ここが高千穂だろうと結論するに至ったのだから、どちらかわからぬと茶を濁した本居宣長の域から出ていないことになる。そこでディベーターの私は、物理学（ナノテク）と言霊（英語学）のパースペクティブから新理論を展開してみた。田尻氏には阿蘇神社へ直接案内していただいた。梅原氏の軌跡をたどってみたいと思ったからだ。ここには教育勅語があり、男は左回り、女が右回り、それぞれ2回という動きがあり、あきらかに振り、舞い、そして磁石の原理を見た。リニア・ロジックではない。

あらゆる舞いが、渦巻き状に回り、中央に収斂（しゅうれん）されていく。鳴門の渦潮のごとくすべてがつくりかためられていく。ディベートも「言向け和わす」という納得を狙いとするものなら、術ではなく道である。電池ではなく磁石である。昨夜の神楽もマグネットであった。しかし、高千穂の神楽に33のヴァリエーションがあり、仏教（観音）まで入っている。

しかし、午後出向く椎葉の神楽はまさにオリジナルで決して観光客用ではないという。高千穂峡で湧き水のコーヒを3人で飲み、中元氏の車に乗り換え椎葉へ向かう。椎葉村の

元助役、黒木勝美氏と椎葉クニ子女史（民宿焼畑）の車の中で、50 分間、椎葉のダム水没悲話を耳にした。1925 年から 1930 年にかけて九電により上椎葉ダムのあと、佐久間ダム悲劇が生じ、その後、あの巖窟王（蜂の巣城のヒーロー）による徹底抵抗の様子が連日テレビで放映される。そのきっかけとなった最初の犠牲者が上椎葉ダムだ。村々の文化が沈んでいく姿を見て、泣く人が多いというが、部外者の私だって涙ぐむ。だから佐久間ダム、秩父ダムと調査を重ねたのだ。徳山ダムも、調査という名目で始まったが、いつの間にか、乗っ取られた。ここのダムでも調査は4、5年前から始まっていた。いま凋落気味の朝日新聞が右系のメディアと対等に立つには、環境問題においてしかないと思う。民宿「焼畑」での語り部、椎葉クニ子女史（83）の焼畑伝説の口伝は、DVD で収めておく必要があると思った。学がなくても経験則で語るこの巫女的存在は、まさに無形文化財だ。1年目はソバ、2年目はヒエ、アワ、3年目は大豆、小豆、そしてそのクリティカル・タイミングは、雲の動き、虫（ハチやカマキリ）等々を見て決めるという。大学へ行くと多くの人は故郷の伝統を捨てるといふ。椎葉村の人間は村を捨てず、町や市へ走ろうとしないから cool である。進化こそ逆進化であると私は吼える。熊楠も同じことを言ったであろう。芋焼酎と焼畑で育ったソバ、その他の野菜を食いながら、私は酔ってかなり饒舌になった。日本は文明から文化、歴史から神話に戻り、モノからココロに戻るべきである。津田左右吉（1873-1961）の左翼天皇観からの、脱却が第一ステップだろう。